

昨年度行われた「第39回
全国中学生人権作文コン
テスト兵庫県大会但馬地
区予選」の優秀賞受賞3
作品を紹介します。

自信をもって 「不登校です」

城崎中学校1年

井垣 ゆう

私には小学二年生の妹がい
ます。彼女は今、いわゆる「不
登校」です。

彼女は、五人家族の三姉妹
の末っ子に生まれました。両親は、父方の祖父母と共に写真スタジオを営んでいます。お客さんとの交流もあり、地域の友達との付き合いも多い方だと思っています。末っ子で見た目も愛らしいので、みんなから好かれています。

そんな彼女が、なぜ不登校になったのでしょうか。

そもそも、一年生のころは、毎日とても真面目に学校へ行っていました。先生にほめられるほどピンと背筋を伸ばした良い姿勢で、授業を受けていました。しかし、二年生になり、十日間のゴールデンウィークが明けると、登校前に「頭が痛い」「おなか痛い」と言って、学校を休むようになりました。でも、それもお昼前には「治った」と言います。それをくり返して一週間が過ぎたとき、母が「行きたくないなら行かなくていいよ」と言うと、彼女は「行きたくない」と言いました。なぜ行きたくないかを話し合った結果、大きな原因は「図工の授業」でした。虹に色をつける授業だったのですが、あらかじめ配色が決まっていました。それが彼女にとってショックだったようです。話し合いからしばらくしたあと、彼女は校長先生と話しに行き、正式に不登校になりました。

私は、彼女の姿を見てとても驚きました。私は今まで一度も授業に疑問を持ったことがなかったからです。改めて考えてみると、虹の授業のよに、押しつけのような授業

がかなりあったように思えます。そんな授業に疑問を持たないことは、逆に怖いことなのかもしれないと思いました。彼女は、今まで学校に行っていた時間、学童保育に行くようになりました。城崎の学童保育はこども園が運営しています。通常は放課後に利用するところですが、園長先生の計らいで、朝からお世話になっていきます。園の子どもたちと遊んだり、先生と勉強したりしていました。

「人と違う」ということ

豊岡北中学校2年

橋本 紗良

みなさんは、これは「人と違う」というものがありますか。人間ならば一つは人と違うものがあると思います。それをあなたはこう思っていますか。人によって「良い」と思う人もいれば「嫌だ」と思う人もいます。私は、人と違うと不安になったり、間違えていたらどうしようと思ってしまうんです。だから、人と同じことをするようにしてきました。でも私には、「人と違う」にあるものがあります。そのあるものが、そんな考えを変えてくれました。

私は、中学一年生の十月頃に不登校になってしまいました。学校に行かない生活を送っていました。

ある日、久しぶりに学校に行きました。本当に久しぶりだったので、とりあえずみんなとは違う部屋に行きました。でも、まったく人に会わないわけではありませんでした。何か言われているような気がしました。がんばって学校に行ったのに、なぜか悪いことをしているような気持ちになりました。嫌な気持ちにもなりました。確かに私は周りの人と違って毎日学校に行っていないし、部活動にも行っていないです。授業も受けていないし、教室にもあまり入っていないです。周りの人と同じことをしているのかと言われると、しているとは言えませんでした。周りの人が見たら、おかしい、人と違うと思うかもしれません。でも私はおかしいなんて思っていないし、これが自分自身だと思っています。今まで全然学校に行けなかった私が学校に行くこと、学校に行ったことが大きな成長だと私は思っています。私の親もそう言ってくれました。「人と違うもの」があるのなら、「人と違うこと」をしないとは前へは進めないと思

います。私は特にそうでした。学校に行けるようになるため、まず違う部屋で過ごすようにしました。それからみんなと掃除をしたり、給食を食べたりして教室に慣れるようにしました。今も完璧に行けていないとは言えませんが、どんな形でも毎日学校に行っているし、部活動にも行っています。授業も少しずつだけ受けているし、テストも受けています。人と違ったことでこんなにも強く成長したことは自分でもすごくびっくりしています。このような私みたいに「人と違う」というのはだめなことなのでしょうか。

小さい心の僕

但東中学校3年
能勢 紀仁

世の中には、色々な人たちがいろんな悩みや問題をもっています。

小学校のころ、毎朝母は玄関で見送ってくれていました。ある日の朝、いつものように僕を見送ってくれる母に、

「学校に来るときは、サングラスをかけてこないでほしい。」と言っていました。でも帰ってきた答えは

「分かった。」ではなく、「それは無理、できない。」と母は言いました。僕は集合の時間が気になって何も言わずに集合場所に向かいました。歩いている時、僕は嫌な気持ちになっていました。

母は目が悪く、僕が小さい頃から黒いサングラスをかけています。親子遠足や運動会など、いつも外では黒いサン

グラスをかけています。

なぜそんなことを言ったのか。僕自身はつきり分らないのですが、おそらくサングラス姿の母を見られることが恥ずかしかったり、僕が友達に何かうわさされるのが嫌だったのかもしれない。なので、学校にサングラスをかけてこないでほしい、と言っていましたのだと思います。

見た目と言えば、僕自身も気にしていることがあります。身長が低いということ。クラスで一番低く、後輩や女子よりも低いです。身長が低いことを時々周りからいじられることもあり、嫌でした。身長以外に体の中は元氣です。

以前、スーパーに買い物に行った時のことです。僕より低い身長の人の方の方が買い物をしていました。特に誰か見ている人はいなかったけれど、僕は気になっていました。もしかしたらこの男性の方は、病気のせいで身長だけが大人になれなかったんだと思ったし、身長が低いということに対して、嫌な思いをしなかったんだろうかと思いました。

春頃の新聞に、低身長の